伊藤●二丈福吉の神幸祭を見ましたが、素晴らしい祭りです。

しかし、残念なことに観客は地元の人たちだけ。もっとPRし、多くの人に知らせる価値があります。糸島にはたくさんの伝統文化がある。これも糸島の魅力ですよ。

高橋●地元の人にとっては、伝統行事も生活の一部で、その魅力については逆に外から来た人の方が、新鮮な魅力を感じるのでしょう。

平野●外部に向けた、糸島の魅力の情報発信が必要ですね。

高橋●地元の人たちが地域の魅力に気付き、どう発信していくかということでしょうね。

糸島の資源

相互に連携し、生み出す力がたいせつ

水素産業、先端技術、九州大学、糸島ブランド、市民参画…

世界で1、2位の水素研究

高橋●先ほど、水素関係のお話が出ましたが、次世代エネルギーとして、菊川さんの立場からお話を聞かせてください。

菊川●すでに糸島には、大きな資源があります。それは九州大学や水素タウンの実証実験、私が勤める水素エネルギー製品研究試験センター（ハイトレック）などです。

九州大学には、国内に十数か所しかない、燃料電池自動車に水素ガスを充填する水素ステーションがあり、実証研究が進められています。

また学内に、水素利用の研究開発の拠点・水素エネルギー国際研究センターが建設され、研究が本格的に始まりました。さらに、産業技術総合研究所の水素材料先端科学研究センター（ハイドロジニアス）も設置されています。

大学の中に、国立の研究施設があるのは珍しく、九州大学の水素研究が注目されているということの表れです。

市長●それが地域にどのような好影響をもたらすのですか。

菊川●水素を中心とした産業を誘致できると考えています。

大学の知恵と情報、私たちが行う実験のデータ、水素タウンの実証実験結果、これらの情報を発信し「糸島に来たら水素情報が得られる」「ここで研究開発をしていこう」「新製品を作っていこう」こういった企業の誘致ができるのでは、と考えています。

高橋●それは、日本や世界で何番目にすごいものなのですか。

菊川●水素の世界では、国内では間違いなくトップ。世界でも、1、2位を争うものです。その資源を求め、水素に関する企業の研究施設ができるだろうと予測されるのです。

平野●そういったことを市民が体験することはできますか。

菊川●できます。実際に福岡水素戦略のイベントでは燃料電池自動車の試乗会なども行っています。

2015年の燃料電池自動車の販売に向け、自動車・石油・ガス会社などが合意し、研究段階から量産化に向けた流れになりつつあります。

高橋●では2015年に、糸島にいち早く燃料電池自動車が走ると考えていいわけですね。

菊川●そうです。そういった企業を誘致できれば、糸島がより発展していくことになります。

市長●水素関連の製品については、多くの企業が挑戦すると思います。ターゲットを絞り、企業誘致を進めたいですね。

水素関連の企業が集まってくれれば糸島は発展します

菊川 重紀さん

そのためには、糸島やハイトレックを訪れる人を増やし、将来「この地域に拠点を構えよう」という考えにつなげていきたいですね。

家庭用燃料電池の普及

高橋●伊藤さんは、家庭用燃料電池システムの実証実験に参加されているそうですが…。

伊藤●CO_2の削減に協力できることはもちろん、光熱費が安くなること。この2つの利点が使い始めたきっかけですね。

使い始めて2年経ちますが、CO_2の削減に貢献できますし、光熱費も1割ほど節約できました。しかし設備が高いというのがネックですね。

市長●300万円以上しますよね。30万円程度になれば利用者も増えると思うのですが…。

メーカーの人は、10年後には数十万円代になると断言し、頑張っているようです。

高橋●糸島は、より水素のまちになっていくということですね。

では、農家の立場から糸島の資源はどのように考えますか、平野さん。

商・農・工で第6次産業を

平野●糸島産は、どこに行っても一目置かれます。さらに、九大移転や糸島市誕生など、今、いいタイミングの中にあります。

「糸島は盛り上がっているね」とよく言われます。そういう意味でも、もっと地の利を生かした農業を行い、新しいことも開拓したいですね。

そのためには「体験」がキーワードになると思います。例えば牡蠣（かき）も、実際に海辺で食べることが一つの体験として価値を上げます。

私たちはこれを「糸島インスタレーション」と呼んでいます。同じ商品を買うにしても、糸島の空気の中で体験し、購入することがビジネスになれば面白くなります。

市長●農家は2通りに分けて考えないといけないと思います。

一つは、伊都菜彩（いとさいさい）に登録する120O戸の高齢者農家など、毎日、数ケースをお店に持ち込んで成り立つ農家。もう一つは、500戸ほどの専業農家。大量に生産し、販売できるルートが必要で、一定以上の値段で売らないと、生き残っていけません。

伊都菜彩も大事です。しかし、大量生産・販売ができるシステムも必要です。つまり、「伊都菜彩があるから、糸島の農家がすべて潤っている」と思うのは大きな間違いです。

高橋●糸島産のブランド力の強化や糸島の資源の活用など、九州大学との絡みはどうなっているのでしょうか。

吉木●農業面でのブランド力の強化は、農学部・農学研究院の先生たちの出番だと思います。

昨年「アグリコラボいとしま」（糸島農業産学官連携推進協議会）が立ち上がり、農家と糸島市、JA、県の普及指導センターが、農業の発展と、糸島をどのように元気にするか、いかに新しいものを作り上げるか模索しています。

最終的には、商・農・工の連携で、農産物から新しい産業ができる、第6次産業にすることを目標にしています。

糸島の農業の活性化について、大学が協力できることがあると思います。

高橋●では大学に「糸島産のブランド力を高めてほしい」とお願いしたら、どうなりますか。

吉木●農家からの相談のすべてを、大学が解決はできません。そのため、県の普及指導センターやJAの協力が必要です。

大学は、教育と基礎的な研究を行うところです。それが結果的に、応用に結びつくのですが、すぐに解決策が出てくるわけではないのです。

ちなみに「アグリコラボいとしま」では、実質的な連携ができるように頑張っています。

大学との連携というと堅苦しいイメージですが、ここでは、農家も参加し、現実的な話の中に、大学の知識を出していくものになります。

市長●九州大学との連携事業には、ラーメンプロジェクト、アグリコラボいとしま、新品種ブドウのブランド化など数多く、すでに開発が始まっています。

市民が運営するイベント

高橋●クラフトフェスについてお尋ねしますが、芸術家である茂渡さんの立場から、ご意見はありませんか。

茂渡●クラフトフェスで多かった意見は「工房に行きづらい」というもの。これは、お店の雰囲気ですね。「何か買

実証実験に参加し将来のCO2削減に協力しています

伊藤 洋介さん

元気な糸島づくりに大学が協力できることはあると思います

吉木 美恵子さん